

【研究ノート】

ダ ル ク
沖縄DARC開設の経緯とユタとのかかわりについての
調査研究中間報告

Interim report: Yuta(shaman in Okinawa) and the process of establishing
DARC(Drug Addiction Rehabilitation Center) in Okinawa

片本 恵利

Eri KATAMOTO

1. 問題の設定と本稿の目的

（1）はじめに

本稿では、沖縄の伝統宗教職能者であるユタ（後述）が薬物依存者のリハビリテーション施設である沖縄DARC¹⁾（後述）開設の経緯にどのように関わり影響を与えたかについての調査研究について現時点での考察および新たな問いを提示するところまでを行いたい。

この調査研究は当初素朴な筆者の問題意識に基づいて始められ現在も調査対象が増え続け、また問題意識が変化してきている。本稿はその中間報告である。

（2）調査研究の動機

以下に、かなり素朴なものだが、今回の調査研究の動機を述べる。

筆者は、沖縄の伝統宗教職能者であるユタが沖縄DARC開設の経緯に関わった経緯をめぐる調査研究を通じてユタの役割について考察し、今日の心理臨床のありかたを自己省察していきたい。そのように考えるに至った経緯を以下に述べる。

筆者は大学院時代、「沖縄に DARC ができデイケアをしているが「杵」²⁾ がなくて危ない、事故が起きないか心配」との情報に触れ、確かに「杵」がないと怖いと感じた。後に、沖縄 DARC に筆者の学生時代の調査研究の協力者であったユタがかかわっているという情報が伝わって筆者は心を動かされ、以前の筆者や同業者が沖縄 DARC に抱いた印象・態度に関して、セラピスト／支援者もクライアントも守られるためのものであるはずの「杵」が、この場合は単に専門家や既存の秩序を守るために依存者を排除し必要な支援から外すための「杵」として働いてしまったのではないかという疑問を抱いた。ここで、仮に前者を「杵1」、後者を「杵2」とする³⁾。

1) DARCの名称と表記については、上述の正式名称Drug Addiction Rehabilitation Center の頭文字を取ったDARCという文字列が「ダーク」と読まれてネガティブなイメージを与えるのを避けるため「ダルク」と表記されることが多いようであるが、本稿では、「DARC」と表記することにする。

2) 「杵」は心理臨床では極めて重要な概念でありこの調査研究の柱の一つでもあるので後述する。

3) なお、このような考え方は学校教育の中でも不登校や非行への対応をめぐるたびたび指摘される。つまり、既存の学校の秩序を守ろうとする「杵」が「杵」からはみ出す児童生徒を生み、不登校や非行につながっているというものである。

筆者の危惧に反して沖縄DARCは大きな事故や問題を起こしておらず、また対人援助のあり方をめぐってオープンダイアログ⁴⁾や当事者研究⁵⁾など従来とは違うアプローチが注目されるようになってきていた。そこで、当初は単純に、沖縄DARCの開設に関わったユタであるUさん（故人）の関係者にインタビューを行い当時の経緯を資料として残し、また心理臨床における枠と専門性について示唆を得ることを目的として研究を開始した。

（3）先行研究について

1）DARC および薬物依存についての先行研究

DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center) は、1985年近藤恒夫によって薬物依存者の回復ために東京で設立された。AA (Alcoholics Anonymousアルコール依存者の回復グループ) から受け継いだ12step、毎日3回行われるミーティングに参加することを活動の中心に据えたりハビリテーション施設である。沖縄DARCは、1994年2月に5名のメンバーが来沖し、7番目のDARCとして恩納村のゲストハウスと宜野湾市のデイケア、ナイトケアから始まった。2021年現在県内に9施設が出来、100名を超える利用者がある。一般にDARCの施設立ち上げは警戒されることが多いが、沖縄DARCは地域活動への積極的な参加などを通じて受け入れられてきたようである。中には優良福祉団体として表彰された施設もある。

薬物／ドラッグについては、渡邊（2019）による狂気・犯罪・病というスティグマとしての薬物への社会のまなざしの研究がある。また、松本（2016,他）他によるアディクション臨床に関する多数の著述、当事者研究（例えば上岡、大嶋（2010））などが挙げられる。

2）ユタについての先行研究

沖縄の伝統宗教職能者には大きく「ノロ」と「ユタ」の二系列がある（高江洲、1993など）との整理が一般的である。村落共同体の公的な祭祀を担ったノロ等に対し、ユタの多くはトラブルや巫病に苦しんだりするプロセスを経てユタとしての能力を授かり、死者の口寄せ、依頼人の家族の運勢や儀式の日取りなどについての卜占、不思議な体験（夢など）の解釈や現代医学で改善が見られない心身の不調についての判断とアドバイスなどを行う。なお沖縄の伝統宗教職能者の呼称はノロ、ユタ両系列ともバリエーションが多くまたユタの呼称には差別的ニュアンスが含まれるとも言われるが、本稿では現時点で得られたすべての語りにおいて「ユタ」の呼称が使われていたことから「ユタ」の語を用いる。

4) フィンランドで統合失調症の急性期治療のために始められたアプローチ。当初は医療サービスの不十分さを補うためのものという位置づけだったが高い効果があるとして注目されている。

5) 「浦河べてるの家」で当事者研究を始めた向谷地によると、「統合失調症や依存症などの精神障害を持ちながら暮らす中で見出した生きづらさや体験（いわゆる“問題”や苦勞、成功体験）を持ち寄り、それを研究テーマとして再構成し、背景にある事から経験、意味等を見極め、自分らしいユニークな発想で、仲間や関係者と一緒になってその人に合った“自分の助け方”や理解を見出ししていくとする研究活動」のである。

3) DARC とユタのかかわりについての先行研究

西村（2000）は巫医がDARCメンバーとともに巡礼をして回ったエピソードに触れ、「DARCとユタを結び付けたものはspiritualityだった」（西村（2000）①）と述べている。また、エイサー太鼓⁶⁾をプログラムに取り入れたことで、②「太鼓による霊的回復」がメンバーに体験された（西村（2000）②）とも述べている。

（4）本研究の意義

以上見てきたようにDARCまたはユタのどちらかに関する研究の蓄積は多数あり、現在もむしろ盛んになっている。しかし、現在全国に約60か所89施設あるDARCの中でその開設にユタなどの伝統宗教職能者がかかわった事例は沖縄のみでありその記述自体に意義がある（意義その1）。また、西村の文章は「雑記」という形で一人の「巫医」による巡礼と太鼓が取り上げられているが、そこで述べられている上述の二点（西村（2000）①および②）について、西村が挙げた以外のユタのエピソードも拾いながらより厚い記述と検証することにも意義があると考えられる（意義その2）。本研究の意義はDARCとユタの関わり方の歴史的経緯を追うことにとどまらず心理療法の在り方についての知見を得ることを目指すことである。それは、塩月（2012）の言う「シャーマニズムと心理療法とを単にどちらか一方を他方のアナロジーとして扱ったり、理解のための道具につかう」のではなく「両者を一組のものとして比較考察を重ねていく」ものにつなげていきたい。そこでは、ユタについて塩月（同）が小松（1999）の論を引きながら述べるように、「シャーマニズムは（略）文化の多様な側面との関係の中で理解」されるのであり、東畑（2017）が言うように「心理療法とは何か」という問いが「心理学の外部で」問われることになる。このような視座に立って心理臨床における「枠」および心理臨床家の専門性についても何らかの知見を得たいと考えている（本研究の意義 その3）。

（5）本稿の目的

本稿は継続中の調査研究の中間報告として、上述の本研究の意義その1からその3に関わってごく大まかな検討の切り口およびあらたな問題と仮説の提示までを行いたい。ユタの調査分析に当たってはユタのUさんを中心に据えることにする。その主な理由は、Uさんが沖縄DARC開設当初自身の住居の建物の一部をデイケア施設に賃貸物件として提供したオーナーであり⁷⁾、沖縄DARCに最も近い場所で最も長くかかわった人物の1人として挙げられることである。

6) 元は先祖供養のためと言われる沖縄の旧盆の郷土芸能で近年は創作も盛んに行われている。

7) はじめはUさんの勧めでUさんの夫がDARCと契約を交わしたが、DARC開設後しばらくしてUさんの夫が他界して以降はUさんが大家であった。

2. 調査研究の方法

本研究では、半構造化面接によるインタビュー調査と質的分析を行う。なお、インタビュー協力者には口頭および文書で調査の目的と協力頂きたい事柄を説明し、調査研究への協力および論文発表の同意を得て調査を開始し、発言箇所についての内容確認と文章化の同意を得た。

(1) 調査対象

沖縄DARC開設当時の状況を知る関係者（当時および現在の沖縄DARC関係者（スタッフおよび利用者）、Uさんにゆかりのある方のうち調査に応じてくださった方。（2021年7月現在12名。）

(2) インタビュー方法

半構造化面接として下記の質問項目を設定し、個別に、一部は調査協力者が沖縄DARCやUさんにゆかりのある方を同席させることを希望したため2~4人を同時に、対面、または（コロナ禍の影響で対面が難しい状況では）オンラインでインタビューを行った。また、メール、書簡、電話による確認を複数回行った。

(3) 質問項目

インタビュー対象者には、以下の項目について質問を行った。

- ・ 基本情報（属性、沖縄DARCやUさんに関わった期間など）
- ・ 沖縄DARCとのかかわりについて
- ・ Uさんとのかかわりについて
- ・ Uさん以外のユタとのかかわりについて
- ・ Uさんの家族、Uさんの関係者とのかかわりについて
- ・ 医療関係者、他の専門家とのかかわりについて
- ・ 地域とのかかわりについて
- ・ その他特にかかわりが思い出される人物について
- ・ DARCのイベントについて
- ・ その他沖縄DARCについて思い出されることについて

(4) 分析

上記項目についてのインタビュー調査と並行する形で帰納的分類によるカテゴリー生成が現在も続いている。

3. 現在の分析の状況

現時点では、上記の作業を経てユタとDARCについての言及の整理として以下の5つの視点によって帰納的な分類を行い、下記のカテゴリーが浮かび上がっている(表1)。ただしこれは現時点での分類であり、今後変わっていくことが予想される。

表1 ユタとDARCに関する言及の整理

視点	(1) 語り手から見た沖縄DARC	(2) ユタ	(3) ユタ以外の人	(4) 地域	(5) 霊的なもの／超自然
カテゴリー	<ul style="list-style-type: none"> ・DARC、メンバーの特徴 ・成功例 ・語り手の人生にとっての位置づけ ・苦しみへの共感 ・ユタとDARCの類似性 ・米軍との比較 	<ul style="list-style-type: none"> ・Uさんの人柄 ・Uさんとの巡礼、儀式、ハンジ以外のかかわり ・Uさんによる巡礼、儀式、ハンジ ・Uさん以外のユタによる巡礼、儀式、ハンジ ・ユタ以外の儀式 	<ul style="list-style-type: none"> ・Uさんの家族 ・医療関係者／専門家 ・非専門家 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民 ・警察、行政、医療 ・ボランティア ・イベント 	<ul style="list-style-type: none"> ・土地のエネルギー ・沖縄の精神世界 ・太鼓の持つ霊性

以下に、調査で得られた語り手の発言を引きながらそれぞれのカテゴリーを説明する。なお、〈 〉内はインタビュー協力者の発言の真意を損ねない程度に個人が特定されないためや発言の意図が伝わるようにするための言葉の補足や言い換えを行い、話者の確認を得ている。

(1) 語り手から見た沖縄DARC

・DARCおよびDARCメンバー⁸⁾

(沖縄に限らず一般に) DARCメンバーは(少なくともDARCに来た当初は)社会から〈孤立〉しており、社会的マイノリティー、例えば〈LGBTの人は多い〉そうである。〈クスリは道具。根底は孤立。なくなればクスリ不要〉であるが、依存者には〈やったことない人に分かるわけがない〉〈やめろと言われたくない〉という気持ちがあり、医療機関等でなくDARCの中で〈仲間、友達、仲間意識を見つけて良くなる人たちが出てくる。〉

特に創設当初は行政、医療、司法などの援助が得にくかったこともあり〈立派な(一つの)DARCでなく小さいのをたくさん〉作り〈組織にしない〉方針である。また、〈“定着支援”ではなく“漂流支援”、数あるDARCを漂流するうちにどこか合うところが見つかるという〉、〈(ある集団で一定の割合の人しか働かないという働きバチの原理を引き合いに)一つの組織での定着率を上げるより巣の数を

8) 〈DARCは世話する人とされる人という関係にない〉という言及があったように、支援者―被支援者という一方的な縦の力関係がない。本稿で「DARCメンバー」あるいは「メンバー」という表現をする際には利用者とスタッフの区別を設けていない。

増やした方がよい」という考えのようである。閉じた関係の中で個人の適応を目指すアプローチでは〈刑務所と一緒に逃げたくなる〉が、〈組織からはじいちゃう。裏切者とか〉という対応でなく〈逃げたいものは逃げさせたらいい。行くところなくなると戻ってくる。〉と、間違いや逃げたくなることは織り込み済みで〈DARCに必要なのは、添い寝（＝一つ屋根の下で寝食を共に）することと寄り添うこと。人間は間違ふものだから。〉との言及があった。

・成功

沖縄DARCは、活動や組織運営の面で〈スタッフの離職率が低く定着が8割超えている〉〈沖縄がDARCの発展の分岐点になった〉、沖縄DARCから他の地域に移って活動したメンバーによって〈DARC運営（特に地域との関係づくり）のノウハウ〉や〈太鼓が広まった〉などの言及が見られた。また、〈2,3日で急にいなくなる人が少なく、定着率⁹⁾が高い〉〈(近年)大きな事件が起きていない〉そうで、また〈当事者の国家資格取得者が8名くらい〉いるそうである。また、〈以前は県外者ばかりで地域からの紹介が少なかった〉のが現在では〈他の施設では受け入れ困難な人が沖縄DARCで定着しているというエビデンスが出てくると（公的機関からの）相談がドンと増え〉、現在の沖縄DARCではごく近い地元を含む県内者でも〈予想するほど大きな問題はな〉〈¹⁰⁾、〈逆にウチナンチュが多いので地元っていう〉感じで〈県外行くくらいだったら俺はDARC行かない〉という反応もあるようである。また、〈地域にへつらわなくて済んだのが沖縄は良かった〉〈沖縄では地域に受け入れられていると思うので成功していると思う〉との言及もあった。〈地域と関係つくっていけばDARCの活動も受け入れられていくというモデルになった。幸運だった〉、〈県外から沖縄への憧れで来るという役割を終えて沖縄DARCが沖縄の人たちの財産になれてるんだったら沖縄DARCを開設した成果〉との言及があった。

・語り手の人生にとっての位置づけ

例えば〈懐かしい〉とか〈きつかったので二度と戻りたくないがあの体験があったからクスリがやめられた〉などの言及や〈個人的には、地域の人とのかかわり方などDARC運営上必要なことは全部沖縄での経験が基本〉となったという言及もあった。

・メンバーの苦しみへの共感

〈精神的に追い詰められてる人〉〈渦に巻き込まれて〉〈表に出さないが苦しんでいる胸のうかがひしひしと伝わってくる〉との言及があった。

・ユタとの類似性

例えば、〈ユタとDARCの回復過程が似ている〉などである。そもそもUさんが自宅物件をDARCに

9) DARCはリハビリテーション施設であり、NA（薬物依存者の自助グループ）につなげ、いずれは社会復帰を目指すものであって長期の「定着」は想定していないが、ここでは入所直後に逃げていなくなる人やスタッフの離職が少ない、という意味である。

10) 依存症からの回復の支援では一般に、スリップと言って薬物乱用をやめた人が再び使用することにつながる人的物理的環境が残っている元の生活圏から切り離すのがセオリーである。

提供することにした理由が〈ユタとDARCが似ている点があるから〉だったそうである。また〈(UさんがDARCメンバーを)病人にしなかったのはすごい。(支援者・被支援者が)スポンサーとスポンシー¹¹⁾の関係〉〈(内省、反省でなく)とにかく動かしてとにかく霊場に行くことで(回復を目指す)。私たちの霊場はミーティング。〉〈雨が降ろうが槍が降ろうが、毎日〉との言及があった。

・米軍との比較

〈薬物依存より米兵が怖い〉と、子ども時代に米兵によって怖い目に遭わされた体験を話された方もあった。

(2) ユタ

・Uさんの人柄

〈マリア、観音のような母心〉〈慈悲深い人、人助けのために生まれてきた〉との言及、筆者の調査依頼で〈懐かしくて(Uさんの)古い記事を集めた〉という方もあった。DARCを〈受け入れてくれたのはUさん〉〈優しくしてくれたな〉との言及もあった。戦争体験に基づく〈恒久平和〉への強い思いがあったとの言及があった。

・Uさんとの巡礼・儀式・ハンジ以外の関わり

〈初めて来た時に挨拶に伺って、デイケア(＝昼間の活動場所となったUさんの住居建物の一部)にいる時には顔を合わせて〉〈あいさつ程度〉というつきあい方だった、UさんがDARCのデイケアで(プログラムとして)〈ユタについてお話されることもあったが(内容は)よく分からなかった〉〈Uさんがユタと知らないメンバーもいた〉という言及があった。〈同じ敷地にいても干渉しないで自由に使わせてもらっていた〉そうで、メンバーの何人かがUさんの住居を訪れた際にはUさんが〈おなかすいたか〉と聞きながら〈本当にフレンドリーな感じ〉で〈何かしてあげられるわけではなくお話聞いてあげる〉関わりをしていたとの言及があった。中にはその部屋でゴロゴロしていたメンバーもあったようである。Uさんが〈神様の前で寝ときなさい¹²⁾〉と言っていたとの言及があった。Uさんによくなついていたメンバーも複数いたようである。〈(沖縄DARCにとって)一番関係が長続きして一番身近だったのはUさん〉で、例えば〈仕事や地域の方を紹介してくれ〉たりして〈たくさんのことを応援、親切に良くしてくれた〉という言及があった。また、〈怒られたこと、いやな顔をされたことが一度もない〉〈Uさんのことは(宗教的な意味でなく人間として)信じてた。いつも温かく見守ってくださってたのはUさん〉との言及があり、〈(Uさんが亡くなって年数が経った後)に来沖し、Uさんの)仏壇を拝みに行き、仏壇の前で涙が出て長い間止まらず不思議な感じがした。その時の沖縄訪問は沖

11) AAやNAで使われる(助言をする立場の、そのことによって自身もステップアップしていく)先輩メンバーと(相談する)後輩メンバーというような意味合いの語。

12) UさんはDARCメンバーについて「ターリている」という理解をしていたということのようである。「ターリている」とは、ここでは「霊的なものへの感受性の高い人が、霊的な次元で説明される圧倒的な力に抵抗できず本来の状態ではなくなっている状態」とする。

縄に歓迎されているような感じがした」との言及、〈Uさんのことを開設当時のメンバーからよく聞かされた〉との言及もあった。

・Uさんによる巡礼、儀式、ハンジ

沖縄DARC開設直前沖縄の方から当時の中心メンバーに対して〈生まれた場所の湧き水を沖縄に持ってきて儀式をすることの提案〉¹³⁾があり、沖縄DARC開設直後、後述の別の女性からも別の提案があったことを受けてUさんに相談し〈それは正しいです〉と言われ〈ここで(建物をDARC活動に)使うなら一つ提案があります。あなたの生まれ故郷の川の水を汲んで流しなさい。融合してDARC案外うまくいく〉との話があった。冬は雪で地面と川の見分けがつかず危険であり〈コンビニのペットボトルの水でもいいのではという話もあったが最初から嘘をついてはいけないということで〉、中心メンバーの故郷の水を汲んできて沖縄の海に流した。〈それから修業が始まった〉そうである。〈沖縄の前の活動地の神社の榊をもって〉〈聖地と言われる地域を〉〈メンバー全員、Uさんや他のユタ達〉が回った。〈炎天下〉あるいは〈暑かった〉と複数の人が述べている。時期は〈3月〉か〈4月〉のようである。〈たくさんお料理用意して、線香をあげて、食べないで〉〈ユタの方がお祈りして、行く場所行く場所で水¹⁴⁾をお供えして〉〈ずーっと繰り返してやってるような〉〈みんなでお祈り、ユタのお祈り〉、〈また次行って、6か所くらい¹⁵⁾回って〉〈疲れちゃって気失うような。苦行だった〉〈辛かった〉との言及がある巡礼¹⁶⁾が行われた。回った場所については〈階段、山みたいのところ登って行って、礼拝する場所〉〈海辺のそばの森の中の木があるところ〉〈海、沖縄の木があって、岩場みたいのところ〉〈ちょっと(独特の)雰囲気がある〉や〈洞穴、人骨ではないと思うが、動物の骨があった〉との言及があった¹⁷⁾。時間については〈1日ばかり〉あるいは〈2日、3日くらい〉との言及があった。沖縄にも決まったコースをたどる巡礼もある¹⁸⁾が、この時は予め決まった旅程は示されず〈“次〇〇行きなさい”と(神からの指示が)降りてきた〉というUさんの言葉で〈いつ終わるかわからないまま付き合っ〉次々に廻ったようである。途中で〈崖降りたり〉して、というメンバーもいた一方〈道はちゃんとしてた〉というメンバーもいる¹⁹⁾。沖縄DARC開設直後で依存症の回復のために来ている体調のよくない人ばかりであり〈(メンバーが)暴れないか心配〉した人もいたが、〈早く帰らないかな、長かった記憶(がある)〉という言及もある一方、〈初めて行く場所で、観光、レジャー感覚〉、〈儀式のとき(ふざけたのではなく当時の体調と風景や儀式の目新しさから)静かにしなかったこ

13) 霊性の高い方が活動すると周囲により大きな影響を与えやすいことから物事がスムーズにいかないことが起こり得るので、この儀式をすることで故郷でない土地での活動がうまくいくようにサポートしてもらってはどうか、そのためにUさんを紹介してもよい、との趣旨。

14) メンバーからは水に見えたが水と酒だったかもしれない。詳細は不明。

15) 本研究の調査では人数、回った場所などの数は人によって違ったり同じ回答者でも言い直したり変わったりすることが多かった。あくまでおよその数、目安として記述している。

16) ユタの巡礼は、県外の社寺参拝とはかなり違う。決まった参道や鳥居、拝殿などはないことが多い自然の洞窟や湧き水がある聖地などを拝む。

17) 沖縄では洞窟に人骨がある可能性はある。例えば現在のような墓制が普及する前の自然葬の跡、あるいは沖縄戦の犠牲者である。さらに、当時DARCメンバーは意識しなかったかもしれないが、ハブに遭うリスクもある。

18) 例えば「東廻り(アガリマール)」など。

19) これらメンバー間の記憶の不一致については、巡礼の一部は全員で行い一部メンバーのみでさらに回った可能性が考えられるが、詳細は不明である。

とがあり「あなたちょっと静かにしなさい」と言われた)などの言及もあり、全体としては〈皆真剣に祈ってた〉し〈皆神妙に付き合ってくれ)たそうである。ただし〈みんな(後で)文句言ってたよ〉との言及もあった。この巡礼自体の評価は〈そういう経験してないから今でも行われてることに不思議な感じ〉〈廻ることには抵抗なかった〉〈どこから来たかわからない連中が事業やるにあたって、土地に受け入れてもらう、許してもらう儀式として、つかさどるのがユタの仕事として大切なこと〉との言及がある一方で〈(元々信仰している宗教があり)抵抗はなかったけど不真面目で〉〈霊的なことは自分は分からない〉との言及があり、また〈終わった後、ちょっとさわやか、清らか)な気分になったとの言及があった。これら儀式への謝礼は〈支払っていない〉あるいは〈3千円程度のお金か飲み物の差し入れをしたくらいだと思う〉との言及があった。

その他Uさんと別の儀式をしたりハンジ²⁰⁾を受けたとの言及もあったが、〈先祖の墓参りくらいは言われたかも〉という程度の印象のようである。〈DARC施設でも変なことあると利用者が言うようになって²¹⁾ Uさんに「御願」(＝祈りの儀式)してもらった〉ところ、〈悪い人じゃない、女の人で帰り待ってる、かいがいしく(、と言われた)〉との言及があった。ウガンを〈自分でやってくださいよって言われ)て困ったこともあったとの言及²²⁾、〈3、4年目Uさんが「沖縄の竜、日本の竜混ざった。これでうまくいく」と言った〉という言及もあった。

・Uさん以外のユタによる巡礼、儀式、ハンジ

ほとんどのメンバーはUさん以外のユタのことは全く覚えていないという回答だったが、中には巡礼に同行したことを話す方もあった。巡礼の往路で〈(Uさんではないユタに)細かいことを注意され馬鹿にされていると感じ嫌な思いをしたが、儀式の時に言われたことが沖縄DARCの目標と一致していて、(自分たちを)受け止めているのかな、否定はできないな、と思った〉との言及もあった。ところでその儀式は夜の海に行くもので、後で聞いたUさんは〈そんなことしてんの、危ないわね〉と言っていたそうである。沖縄DARC開設当時〈白装束のおばさんに「ここで(活動)やってると頭痛くなりますよ」と、死んだ人たちがたくさんいるとのことで「Uさんに言ったらいい)と言われたことがある、との言及があった²³⁾

・ユタ以外の儀式

Uさんのもとで学んでいる人の企画で米国にある依存症の治療共同体での研修や先住民居住区²⁴⁾でのmedicine man(呪術師)と共同の恒久平和の儀式が組み込まれたツアーに、Uさん他複数のユタ、DARCメンバー、医療関係者、一般市民など総勢17名が参加した。この儀式について〈地球を救った

20) 判示と字を当てることもある。霊的能力によって相手の状態を判断すること。

21) 近隣の学校で生徒が(発作で)倒れユタを呼んだとの新聞記事を見て「こんなことが記事になるのだ」と驚き、その件に触発されたようである。

22) カルト化はDARCが強く回避するところである。Uさんやユタ達ももし強引な布教や勧誘、価値観の強要をしていたら沖縄DARCのユタへの態度は大いに違っていたであろう。

23) この女性がユタであるかは不明である。この「白装束のおばさん」の言葉を受けたこともあってUさんに相談しメンバーの故郷の水を持って来て渡す儀式や巡礼になったとの言及は既述。

24) この地区で採取されたウランが原爆に使用されたことからUさん達にここに行くようにとの神のメッセージがあったことに従い、人類の過ちを詫び恒久平和を祈る儀式を行った、とのことである。

ことになっているがよく分からない)、その時同行したユタ達について〈半信半疑だったけど、親切だし否定できないと思った〉との言及があった。

(3) ユタ以外の人

・Uさんの家族

Uさんの家族は普段は〈世間話やあいさつ〉〈イベントに来る〉程度の付き合いだったとの言及があったが、Uさんの夫は〈豪快で親分肌〉で〈面倒見がよく、困った人をよく家に連れてきて面倒を見たりしていた〉そうである。もともとUさん宅には困っている人が出入りしてUさん夫妻に相談することがあったようである。Uさんの夫は旧日本軍での体験、性格的に人の孤独や悲しみを放っておけない部分がありDARCメンバー（の生きづらさ）への共感を持っていた可能性があった模様である。Uさんの子どもたち（当時すでに成人しており同居はしていない）は、Uさんの指示で餅や料理を持って行ったり、警察の巡回に対応したりしたこともあったようである。

・医療関係者、専門家

沖縄DARC開設前や開設当初から理解を示し支援、連携していた医師、前述の米国ツアーに参加した対人援助職従事者がある。中には途中で関係解消に至った医療関係者もいる一方で〈非常に仲がいい〉との言及のある医療関係者もある。〈（沖縄DARC開設当時は）当事者研究が理解されない時代〉で、医師の団体から〈イベントの後援を断られたことがある〉そうである。

・非専門家の支援者

〈ユタとDARCの回復過程が似ている〉ことに関心を持ち米国にある依存症の治療共同体での研修を受けた方、〈UさんにDARCを紹介〉した方がいた。〈Uさんは慈悲深い人なので（その話を聞いてDARCの入居を）引き受けることにした〉との言及があった。さまざまな支援を継続的にを行い太鼓活動を勧めたりして〈恩人と言えばこの人〉と言われる方、〈職場のレクリエーションの運転手や引越しの荷物運びの手伝いなど〉のアルバイトを単発で頼んだり〈イベントに呼ばれば行く〉という、つかず離れずの関係で継続的に支援された方など複数の支援者があったようである。沖縄DARC開設当時Uさんのもとで勉強していた方は、よくDARCに餅などの食べ物を持って行ったようである。沖縄を離れている開設当時のスタッフが来沖すると〈〇〇（当時のボランティアの方）に会いに行くぞ〉と言うような関係が続いている支援者もあるようである。

(4) 地域

・地域住民

〈沖縄だと（米兵などタトゥーをしている人が多いことなどが影響してかメンバーの風貌が逸脱している印象が強く出ず）メンバーが5, 6人歩いていても（他府県に比べて）目立たない〉、沖縄は医者も大学教員も肩書の前に〈そこで暮らしてる同じ人たち、と構えることなく接することができる〉

という言及があった。地域からの(署名活動など)表立った強い反対運動は一度もないとのことである。〈(寮で、酩酊した人に見られる奇異な行動をするメンバーもいたのに)よく苦情来なかった〉との言及もあった。〈警察が来ることもなかった〉という言及も複数ある一方で、実際には〈警察がしょっちゅう来た〉〈毎日来て細かいことを言われた〉などの言及もあった。〈オウム事件の頃²⁵⁾メンバーが(ふざけて)オウム記事の顔写真をメンバーの写真に入れ替えて道路から見える所に貼って、警察が調べに来た〉こともあったようである。また実際には〈なんであるような人たちを受け入れたのか〉という苦情は、Uさんや、UさんにDARCを紹介した人物には来たようである。しかしDARCメンバーに直接来た苦情として筆者が現時点で確認できたのは、〈地域の清掃活動に参加しない〉と言われたことなど少数である。苦情が(予想より)少ない理由について〈近くに住宅がない〉という立地条件に加え〈当時のスタッフの教育が行き届いていたと思う〉というDARCメンバーでない関係者の推測や〈Uさんがクッションになったと思う〉〈Uさんの夫の性格で(苦情やもめごと)も収めるでしょう〉との言及もあった。

〈1997年頃に初めてimidasにDARCが載って喜んだ〉との言及があるように、当初は社会からの認知度が低く物件の借用については苦労してきたようで、また〈入れ墨姿のメンバーが入浴後の姿を近所の人に見られ〉たなどのトラブルにより退去せざるを得ない物件も複数あった。近年でも〈33か所目でようやく〉物件が見つかった例があるように契約がスムーズに成立する物件は珍しく、断られる過程で〈傷つくことを言われてスタッフが鬱になったり〉するそうである。さらに住民説明会が求められるなど、住民の反対は〈今も小さいのはある〉。しかし〈(沖縄DARCの施設の一つがある自治体で)優良福祉団体として表彰され「(第一印象と違って)真摯に自分自身で取り組んでやめようっていう人たち」と言われた〉ことがあり、〈(ある地域でのDARC施設新設への心配の声に対する住民説明会で、他のDARC施設がある地域の方から)心配なのは当然だが(DARCはその地域にとって)必要な人たちで大きな問題は一切なく心配いりませんとの発言がありガラッと空気が変わって、今では(その説明会をした地域に施設が出来)地域の手伝いにも呼ばれ〉ているとの言及があった。〈社会性が(身について)なく右も左もわからないときに全て沖縄の人が助けてくれた〉〈途中で仲悪くなってしまった人も含めてみんないたから(今がある)〉との言及もあった。

・ボランティア

沖縄DARC開設当初は特に地域から〈誘われなかった(誘われたら考えたがそういうことが必要だと知らなかったし考えなかった)〉ことから地域活動をしていなかったが〈道路掃除などを一回もやっていない〉と地域の方から言われ参加するようになったとか、ビーチクリーンに誘われて参加し〈海浜清掃をする人たちとして写真がポスターに載った〉ことがあったそうである。その後先輩から〈地域に媚びないのが自分のやり方だが(沖縄DARCは)好きなようにやっていい〉と言われ、また〈先

25) 沖縄DARCは1994年に開設されているが、1995年3月にオウム真理教による地下鉄サリン事件が起こっている。

輩を見て地域と仲良くした方がいいと考える) ようになったようで、今は第一世代も「回復者の数は地域の受け入れに比例する」と言うようになっている。〈太鼓が(ボランティアの) さきがけになった〉との言及もあった。

・イベント

〈開所式はテレビ局のホール、(開設して半年後に) 第1回フォーラムを大学で行った〉のは〈東京では現在でもあり得ない〉ことのようなのである。〈友達がたくさんできるから〉と勧められエイサー太鼓を活動に取り入れたことへの言及も多かった。練習の際には〈場所も道具も全部貸してくれて〉〈一から手取り足取り教えてくださって〉〈なんでこんなに沖縄の人いるわけでないのに一緒にやれるように面倒見てくれる。不思議だな〉と思うほど〈依存症を嫌がらずに地域の方にはよくしてもらった〉そうである。薬物のために心身に大きなダメージがあったメンバーたちは、メンバーの1人の知る限り〈DARCで皆で一緒に何かをやったということがなかった〉が〈まとまりのない人たちが一つになって太鼓を叩いて〉最初は〈バラバラで音もそろわなかった〉のが〈毎晩ミーティング後から深夜まで練習して〉〈きつかった〉けれども、〈大好きでみんなで頑張って〉と言及するメンバーもあり、沖縄DARC開設半年後の〈第1回のフォーラムでメンバーの家族、地域の人たちに披露して〉〈すごい楽しくて〉〈一体感があった〉し、〈家族が涙を流していた〉様子を見、〈拍手をもらったことがない人が拍手をもらって〉感動し、〈自分が好きじゃなく毎日少しずつ自殺する状態だったのが、起こってしまったことに対して「よかった」と感じ自分を許せ、他人とつながっていく〉体験をしたようである。〈Uさんの夫が亡くなった後の夏、DARCメンバーがUさん宅の前でエイサーをした〉ことを家族が喜んでいたとの言及もあった。

(4) 霊的なもの／超自然

・土地のもつエネルギー

沖縄DARCを出て年数が経ってから〈ただ観光でなく自分自身のエネルギーを土地と同調させるの大事。そういうことだったんだな〉と感じるという言及があった。〈ユタの人というよりシステム、を通して、いろんな人とつながっていった〉という言及、また〈沖縄(という場所の) DARCにつなげてもらって今まで孤独だったのが満たされたものもある〉という言及もあった。

・沖縄の精神世界

〈役人の人が、DARCは神に守られてるのか何があってもうまいくいと言った。沖縄らしい言い方〉という言及や、〈(DARCとの活動に継続的に参加していた地域住民が突然人が変わったようになって奇異な言動が現れたことについて周りの人たちが「カミダリー」²⁶⁾ だと言ってその後も活動に受け入れて様子を見守っていた〉との言及、地域の複数の人のある種の奇異な言動について〈カミダリーみ

26) 自らを霊的に成長させ何らかの使命を果たすための試練や霊的能力を授かる前段階で神によって圧倒されている状態。精神医学では「ある個人に、幻覚性や夢遊性を伴う心身異常がみられ、それが神・先祖などの超自然的存在と何らかの関係有していると判断される場合」(佐々木, 1978など) などと定義される。

たいになっていた」との県外出身のDARCメンバーによる言及も見られた一方で、〈(沖縄の知人が) ことあるごとにユタの話をされていて少し引いてた〉という言及もある。また〈分からない世界だけど受け入れる。間違っていない、否定できない、疑いの気持ちはあるけど〉との言及があった。

・太鼓のもつ霊性

太鼓について〈何に対してなのか分からないが、音というか、見せるものじゃなく捧げものという感じがする〉、また〈自分なりの解釈では自分、他者との関係が回復することを霊的回復ととらえていて、太鼓を通じてそのような体験があった〉との言及があった。

4. 考察メモ：現時点でデータから導かれる仮説と新たな問題設定

以下に、現時点でデータから導かれる仮説と新たな問題設定を提示する。

(1) 沖縄DARCの「成功」の検討

筆者の調査開始前の印象に反し、現時点では(存続に影響するような)大きな事故もなく利用者が増え定着率がよい、地域との関係が(相対的に)良いなどの点から「成功」していると言ってよいであろう。その要因として、メンバー自身の努力に加えて立地条件、理解のある専門家および非専門家の支援者、Uさんとの出会い(項を改めて検討)などが挙げられる。

(2) ユタとDARCの類似性について

ユタとDARCの類似性について現時点で言及できる範囲の仮説を下記に挙げる。

- ① 社会の中での位置の類似性 「困ったときに便利に使われるが尊敬されず、平時には忘れられる。」
ユタが恒久平和の儀式を行っても社会には認知されず、人々は困ったときにユタに相談するが、平時には忘れられ差別や排除の対象となる。DARCは各種講演会、刑務所や病院での「メッセージの依頼」、依存者の家族や公的機関からの相談が急増している。しかしメンバーは講演会で他の講師と別室に通されるなど差別的な待遇を受けることがあり、多くの人からは今も尊敬はされていない²⁷⁾。
- ② 「霊的なもの」への感受性 近代化のプロセスはユタにとっての神、DARCメンバーにとってのハイヤーパワー(自分より偉大な力)²⁸⁾を抑圧し、個人と大いなるものとのつながりを切って〈孤立〉させ依存を生み出している。両者が共感を覚えるのはあり得ることである。
- ③ ユタのカミダリーからの回復、成巫過程とDARCメンバーの回復の過程の類似性

この点については、非専門家の沖縄DARC支援者が早くから注目して述べていた。両者には不適応の説明モデル、すなわちカミダリー、依存という不適応的で苦しい状態についてのポジティブな意

27) 筆者は、日本における沖縄の位置もユタやDARCと共通する点があると推測している。

28) NA(Narcotics Anonymous)の12ステップで大切にされている、「宗教ではなく、スピリチュアルな」概念(Narcotics Anonymous World Services, Inc. 2011)

味付けという共通点がある。前項で挙げたように「カミダーリ」という概念をDARCメンバーもはじめは驚きを持って接しながら受け入れていったとうかがえる言及が見られた。また〈スポンサーとスポンシー〉という語が示すようなメンバーシップの類似性もある。両者がこれらの点で相互に認め合うような言及が見られた。沖縄の精神世界特有の説明モデルがユタによるDARCメンバーの理解と受け入れを促進し、またDARCメンバーもそれを一部受け入れていた様子が見える。

(3) 西村 (2000、①) の記述内容の検討

DARCの目指す回復は単に薬物を使わないということではない。WHOの「健康」の定義に沿った形で①社会的回復、②身体的回復、③精神的回復のみならず④霊的回復として「自然を感じ、人を思いやる気持ち、謙虚さ、信じる心など人間的な心を取り戻した輝かしい瞬間」(加藤、2018)の四つの側面がある²⁹⁾。上述の12ステップでは、自分がアディクトに対して無力であることを認めることから始め(STEP 1)、自分より偉大な力(ハイヤーパワー)が、私達を正気に戻してくれると信じるように(STEP2)一つずつステップを踏んでいくことによりスピリチュアルに目覚め、アディクトに伝える(STEP12)とある。このステップは特定の宗教の教義を指すものではなく、自分の無力さと自分より偉大な力の存在を認めるのは霊的なものに開かれていくための根本であり、近代化の過程で日本人が否定しそれゆえにユタを排除してきた要因になっているものであると筆者は考える。

沖縄DARC開設直後の巡礼は周囲の勧めが複数あってUさんに相談して行くことになったものである。また、ユタの巡礼は交通費、供え物、食費その他の経費を頼んだ側が支払うのが慣例でユタに頼る者は身代をつぶすと言われるが、DARCメンバーはUさんに何も支払っていないかごくわずかなお礼を渡したのみであり、Uさんは金銭的利益や布教目的でこの巡礼を行ったわけではないと推測できる。DARCメンバーはユタの世界観を鵜呑みにしていた訳ではないがメンバーの故郷の湧き水を時間とお金をかけて汲んで来、また暑さに苦しみながらUさんの指示のままにいつ終わるともわからない巡礼を〈早く終わらないか〉とは思ひ〈後で文句〉を言うメンバーもいる中、全員が〈神妙につきあ〉った。Uさんの提案した巡礼はDARCと沖縄の自然、土地をつなぐためのものであり、人間社会にとどまらない自然や超自然のレベルで彼らの〈孤立〉からの回復を図るものであったと言えないだろうか。

西村の言う「ユタと彼らを結び付けたのはspirituality」という言葉については、現時点では次の3点を述べておきたい。①何らかのspiritualityを介した両者の結びつきはあった。②spiritualityの中身の検討は今後の課題であるが、現時点ではその結びつきは特定の宗教に基づいたものではなくDARCメン

29) キリスト教文化圏で生まれたAA (Alcoholic Anonymous) では違和感なく取り入れられているspiritualityという言葉は、近藤 (2000) によると「WHO (1999) では「超越的、超感覚的、実存的生き方にかかわるもの」とされているがWHO、厚生省でも定義がまともな判断保留の状態」である。1998年WHOの「第101回執理事会において「spiritual (霊的) とdynamic (動的)」を加えた新しい健康の定義が検討」され賛否両論があったが、第52回世界保健総会 (WHO総会) の議案とすることが決定され、審議の結果、採択が見送られた (公益社団法人日本WHO協会)。またSpiritual Healthについて近藤 (同) は「疾病や障害によって一時的に失った人としての存在価値を取り戻すことができたならば「Spiritual Recovery」と呼ぶことができるのではないだろうか」と述べ、「Spiritualityについて考えてみると、それは「生き方」とか「生きる姿勢に何らかの影響をもたらすように働く力」とも言えるのではないだろうか。」としている。

バーが目指すものとユタに共通する「自分の無力さと自分より偉大な力を認めたいなるものに自らをゆだねる」姿勢によるものだった。③Uさんの行った巡礼は上記①②のようなspiritualなレベルの回復を意図し、少なくともある程度それをもたらした。

(4) ユタが沖縄DARCの開設の過程に果たした役割について

現時点でDARCとのかかわりがあったユタとして挙げられたのはほぼUさんについてのものである。本稿ではユタ達全体ではなくUさんの役割について検討する。

①親切な大家

DARCメンバーはユタ業の客ではなくUさんはあくまでDARC施設の〈大家のおばちゃん〉として食べ物差し入れ、メンバーをくつろがせる、話を聞く、仕事や人脈を紹介するなどの世話をした。そもそもUさんがDARCとの賃貸契約を受け入れたこと自体、今も物件探しが容易ではないDARCにとって大きな助けになったことは間違いない。また、DARCメンバーが沖縄で出会った人が皆常に優しくいい人だったわけではなく前項で見たように警戒する人、メンバーから見れば親切だが時にうるさいとかうるさいが親切で否定はできないと感じられる人もあった中でUさんは一貫して〈優しくかった〉ということが現時点で得られた語りでは際立っている。

②とりなす、つなぐ、守り育てる

Uさんがメンバー達をさまざまな方面で紹介した行為は単に新参者の地域への紹介にとどまらず、薬物によって壊れてしまったメンバーの自他との関係を一つずつ結びなおしていくような、それまでの過ちのとりなしでもあったと考えられる。さらに、適切な社会性がはぐくまれる機会に恵まれず不適応行動を起こして社会から制裁を受けるという悪循環に陥っていることが多いメンバーの人間としての成長や社会性の獲得を促す、守り育てる役割を果たしたのではないだろうか。

ユタの祈りは単なる気休めのまじないなどではなく、彼らの世界観に基づいた合理性と目的性を伴う、祖先、自然、超自然とのコミュニケーションである（少なくともそれを目指している）。Uさんは仕事や人脈の紹介と言ったメンバーの眼に見える範囲から、巡礼や儀式では自然／超自然レベル、また先祖の墓参りのアドバイスでは時間軸の「つなぎ」を希求している。米国先住民居住区で行われた恒久平和の儀式は、戦争を起こし原爆を生んだ人類の過ちを詫びとりなす祈りであった。元々病弱で当時でも高齢であったUさんが山の斜面や海辺の洞窟、草むらなどを歩いて歩いたことに代表される献身は、その後の大家としての親切と相まってメンバーの心に響いたであろう。

③DARCメンバーを取り巻く同心円

DARCメンバーはしばしば幼少期から「境界線を壊されて」育っており、対人関係では唯一の頼れる相手への依存が起りがちである（上岡、2010）。沖縄DARCのメンバーも薬物依存によりそのよ

うな状態であったのが「そこそこ健康な家庭で育」った人のように「真ん中の自分が幾重にも守られてい」て「それぞれの間の《境界線》」がある（上岡、同）同心円が徐々に形成されていったと言えないだろうか。つまり、同心円の中心にメンバー（利用者）がいて、その周りをスタッフ、UさんとUさん一家、支援者（専門家、非専門家）、地域住民、沖縄の土地、自然・超自然／霊的な力が同心円状に包み込むような形である。この同心円はUさんがいなくても（他のDARCのように）形成されたかもしれないが、Uさんはその円に層を加え厚みを増す（役割1）、最も内側の応援団であるDARCをすぐ外側（大家）、中間（地域）、最も外側（超自然）から包み込んで機能しやすい環境を整えようとした存在ではなかっただろうか（役割2）。Uさんによって厚みと包み込む力の増した「同心円」がいわゆるenabler³⁰⁾とは違った働きでメンバーを包みこんで、人間としての存在を否定するような言葉や無用のダメージを軽減してメンバーを守り、メンバーが人を信じてつながる力を守り育てたと言えないだろうか。

④UさんがDARC開設の経緯で果たした役割についての仮説

Uさんはただ「親切な大家のおばちゃん」として一人でDARCを支えていたわけではない〈ユタの人というよりシステム、を通して、いろんな人とつながっていった〉という言及があったように、上述の同心円の中でUさんの家族、地域の人脈、そして土地の自然や霊的なものにUさん自身も支えられていたと推測される。Uさんの人柄や人助けをする姿を見て周囲からの信頼が培われていき、UさんのやさしさはUさん自身の戦争体験も影響して培われた恒久平和への強い信念に裏打ちされたものであり、またUさんのユタとしての霊的能力が他とは違うDARCメンバーへの理解と共感を進めたと考えられないだろうか。Uさんは、ユタとしての能力、信念、地域社会とのつながりがあって力を発揮していた。

Uさんに注目して検討してきたユタの沖縄DARC開設の経緯への影響についての現時点での仮説は、「Uさんは単に「親切な大家のおばちゃん」として接したのでもDARCを相手にユタ業をしたのでもなく、「恒久平和への強い信念に裏打ちされたユタの資質を伴った、親切な大家」として、DARCメンバーを様々なレベルでとりなし、つなぎ、守り育てる働きの一翼を担った」である。

（5）心理臨床の「枠」と専門性の検討の切り口

問題設定で述べた「枠2」の例としての成瀬(2018)による従来の医療の「枠」の問題点³¹⁾に関連して、メンバーの〈やめろと言われたくない〉〈やったことがない者にわかるか〉という反発の表現の中に、私たちは多くの依存者の傷つきを見なければならない。彼らの多くは幼少期から保護―被保護の関係

30) 薬物使用を可能にする者との意味で、例えば体面やプライドを優先して依存者の過ち（弁償、借金の支払いなど）の責任を肩代わりしたりする。依存者の生育環境ではしばしばみられる。

31) 成瀬の言及は医療についてのものであるが心理臨床にも当てはまると考えられる

の中で繰り返し体験した傷つきをうめるために薬物を使用して自他との関係を傷つけ、さらに治療機関で新たな傷を負っていて、彼らの「新たな他からの援助の取り入れ行動」の歪みのほとんどは「過去の「傷つき・対処」の学習成果・自助活動」であるから「見かけが奇妙でも、大切な・保護されるべき健康部分でもあり（以上、神田橋（2021））、安易な同情や修正の働きかけはふさわしくない。この点を念頭に置いて、新しい心理臨床の「枠」と専門性のあり方について検討を続けたい。

5. 本稿の限界

（1）データ収集のターゲットへの到達が容易でない

本稿の調査のターゲットとなるトピックの中心人物は故人となっている。さらに、25年以上前のことである上DARCメンバーは当時薬物乱用からの回復を図っている段階であり〈(当時)大変だったから〉とか〈忘れてる〉〈覚えてない〉という言葉が多く見られたように当時の記憶が曖昧だったり、複数の協力者（DARCメンバーに限らない）の間で一致しないものが頻繁にあった。今後調査を続ける過程で他の言及が出てきて本稿の仮説が変更される可能性がある。

（2）調査対象の偏り

今回の調査の大きな特徴は非常に好意的な態度で協力してくださった方が多いことである。それはUさんの人柄によるところが大きいと思われるが、サンプルの偏りを否定できない。沖縄DARCでの体験についてネガティブな位置づけをする方はインタビューに応じない可能性が高く、当時の関係者の中にはすでに亡くなられた方も複数ある。

6. 今後の課題

上記（1）（2）は本稿の限界を示しているが、それらによって本研究が無意味になるとは言えず、むしろ、今のうちに可能な限り記録を整理し検証する意義があると考えられる。本研究での筆者の立場は「唯一の正しい」事実や真相を掘り出すことではなく、故人であるUさんの関係者の話からUさんの在り方を浮かび上がらせ、心理臨床の在り方について示唆を得ることである。これらの点を肝に銘じながら、今後調査対象を広げ分析を洗練させていく計画である。

- （1）Uさんの自然、超自然とのつながりがどのようなものであったかやUさんの果たした役割について、他のDARCや他の支援との比較を通じて検討する。
- （2）沖縄の風土と「異界」について、ユタ、DARC、米軍基地を切り口に考察することを試みる。
- （3）Uさんのユタとしての社会的機能を塩月（2012）を参照しながら整理し、鈴木（2018）が挙げた心理臨床家の専門性の特徴と重ねあわせて考察する。
- （4）今日の心理臨床の「枠」と専門性について、セラピストによるレディメイドの（時に硬直的で、合わないクライアントを排除してきた）「枠」からセラピストとクライアントが共同作業で作る両

者のための「粹」へのパラダイムシフトをめぐって、近藤（1991）や松本（2016）を参照し、クライアントを信じながらゆるくつながり「次々とバトンタッチして」いく(大嶋、2010)ことや「漂流支援」についても検討する。（ここが本研究の主題である。）

(5) 発展研究として、筆者自身の体験を一つの事例としてとらえ直し、東畑（2017）を参照しながら筆者の訓練期と心理臨床の時代変遷、沖縄DARC、沖縄の伝統宗教職能者をめぐって検討考察を試みたい。

付記

筆者が学生の頃に調査に協力してくださり、また今回の研究のきっかけを与えてくださったUさん（故人）とそのご家族および関係者の皆様、調査にご協力くださった沖縄DARC関係者の皆様との出会い、そして筆者に沖縄DARCとUさんとのかわりについて情報を与えてくださった稲福みき子先生のおかげでこの調査研究が中間まで来たことを明記し、深く感謝いたします。UさんやUさんの夫、回復の道半ばで亡くなられたDARC関係者の方々のことを思いながら調査研究を進めてまいります。

参考・引用文献

- 上岡陽江＋大嶋栄子（2010）「その後の不自由―「嵐」のあとを生きる人たち」医学書院
- 神田橋條治（2021）複雑なPTSDの治療手順 原田誠一 編 （2021）複雑性PTSDの臨床“心的外傷～トラウマの診断力と対応力を高めよう” 金剛出版
- 加藤武士（2018）私たちの回復とは ダルク編 ダルク 回復する依存者たち―その実践と多様な回復支援 明石書店
- 小松和彦（1999）憑依型シャーマニズムの危機―シャーマニズム研究の現状と未来を探る 東アジアにおけるシャーマニズム文化の構造と変容に関する文化人類学的研究 平成八～一〇年度科学研究費補助金「国際学術研究」研究成果報告書
- 近藤千春（2000）ダルク利用の薬物依存者の回復とSpirituality アディクションと家族 第17巻3号 p.324-330
- 近藤恒夫（1991）「ダルク誕生のいきさつ」ダルク編集委員会「なぜ、わたしたちはダルクにいるのか ある民間薬物依存リハビリテーション・センターの記録」ダルク薬物依存リハビリテーション・センター
- 公益社団法人 日本WHO協会 健康の定義について 公益社団法人 日本WHO協会 ホームページ japan-who.or.jp/about/who-what/identification-health/
- 松本俊彦（2016）やさしいみんなのアディクション 臨床心理学増刊第8号 金剛出版
- 茂木洋（2005）少年院における心理療法面接に関する一考察―篤志面接委員の立場から― 四天王寺国際仏教大学紀要第40号
- Narcotics Anonymous World Services, Incorporated「なぜ、どのように効果があるのか ナルコティクス

インデント アノニマスの12のステップと12の伝統」 Chatsworth, California

成瀬暢哉 (2018) 特別寄稿 薬物依存症からの回復とダルク ダルク (編) ダルク 回復する依存者たち—その実践と多様な回復支援 明石書店

西村直之 (2000) 薬物依存回復施設沖縄ダルク (DARC) 雑記—地域社会と薬物依存者の回復— 心と社会31巻2号 No.100 2000 p.176-182

佐々木宏幹 (1978) 「カミダーリの諸相—ユタ的職能者のイニシエーションについて」 窪徳忠編「沖縄の外来宗教」 弘文堂

塩月亮子 (2012) 沖縄シャーマニズムの近代 聖なる狂気のゆくえ 森話社

鈴木優佳 (2018) 心理臨床の専門性をめぐる概観と特殊性 —実践の内側からみる専門性に着目して— 京都大学大学院教育学研究科紀要 (2018), 64: 165-177

高江洲義英 (1993) 呪術と精神医療—南島巫女を巡る現在— 河合隼雄, 清水博, 谷泰, 中村雄二郎【編】 岩波講座 宗教と科学8 身体・宗教・性 岩波書店

東畑開人 (2017) 日本のありふれた心理療法 誠信書房

渡邊拓也 (2019) ドラッグの誕生 十九世紀フランスの〈犯罪・狂気・病〉 慶応義塾大学 出版会